

その人らしい生き方と逝き様に寄り添って

岩田 真由美

(結城市役所 地域包括支援センター／コミュニティ福祉学科2002年卒業)

地域包括支援センター（以下、包括）は、平成18年の介護保険制度改正の際、全ての市区町村に設置が義務付けられた、主に高齢者を対象とした総合相談窓口である。高齢者人口3,000人～6,000人毎に1か所設置し、保健師・社会福祉士・主任介護支援専門員の専門3職種を各1名配置することが基本とされており、介護のことはもちろん、医療や福祉、権利擁護に係る相談受付や対応、地域のネットワークづくり、認知症対策、虐待への対応等々、多岐に亘る業務を行っている。

茨城県結城市は、北関東の平野部に位置し、平成27年4月1日現在で人口52,700人、高齢化率26%のごく普通のまちである。包括は直営1か所のみで、今年からサブセンターを1か所委託により設置し、新たな体制で業務を行っている。

私は平成19年に、この直営包括に社会福祉士として配属され、今年で9年目となった。毎日せわしない日々を送っているが、振り返ると実にさまざまな人生に関わってきたと思う。こんな小さなまちでも色々な人がいて、それぞれの生活と価値観があり、その人らしい生き方と逝き様があるものだと感じさせられる。

印象に残っている人の中に、D氏がいる。彼は4畳半2間の小さな借家に同い年の妻と2人暮らし。子どもはいない。昔は会社を経営していたが、事業に失敗したとっていた。彼は心臓病を患っていたが、毎日缶のPeaceを吸っていた。妻は糖尿病と認知症のため生活全般に介助が必要な状態であったが、費用を気にして介護サービスは一切利用せず、彼が世話をしていた。電話も無く、生活はぎりぎりの状態だろうと思われたが、2人共いつもニコニコしていて、不思議と苦しそうな様子は無かった。自動車さえ手放せば生活保護を受給できるのだが、妻の通院先を近医に変えることを拒み、行きつけの店での買い物にも必要だからと言って、廃車のすすめには一向に応じなかった。

彼の楽しみは週に1度、1枚だけ購入するナンバーズ。当たる数字を独自の方法で綿密に計算していた。訪問すると必ず真剣な眼差しで説明してくれるのだが、私には結局理解できなかった。また地震や噴火の発生原理についても独自の理論を持っていて、災害が起きる度にどのような理由で発生したのか、長々と便箋に認めて気象庁に送っていた。80歳半ばとは思えない几帳面な文面で、送る度にそ

のコピーを私にも届けてくれた。そして以前に1度だけあった気象庁からの返信を、何度も見せて説明してくれた。

ある日、妻は糖尿病が悪化し市外の病院に緊急入院した。彼は毎日2回欠かさず面会に行き、何日かに1度は包括に報告に来てくれた。私も何度か病院に行ったのだが、妻は日に日に弱っていき、もう帰れないだろうと思われた。それでも彼は「家に帰ってきてほしい。何にも出来なくても良いから、一緒に暮らしたい」、そう言っていた。

願いは叶わず、妻は逝った。火葬の後、律儀な彼は報告に来てくれた。ひどく疲れた様子で「ずいぶん世話になったな、ありがとう。とうとう（妻が）骨になっちゃったよ。俺もひとりになっちゃったなあ…」と呟いた。1時間ほど一緒に過ごしたあと、何も食べていないと言うので、お茶とクッキーを食べてもらった。帰ろうとする彼の背中を見て『もう会えないかもしれない』、そう思ったのをよく覚えている。

彼は2日後、自宅で息を引き取っているのを親類に発見された。妻の死からわずか1週間後のことだった。

もっと彼を支援する手立てがあったのではないか…そう感じる方もいるだろう。ただ、私はこれで良かったと今でも思っている。彼らしい、素敵な最期だったと。

私たち支援者は、いつも相手の立場に立っているはずだ。しかし時折、支援者側がやりやすい形に相手をはめようとしてしまうときがある。特に忙しい時や苦手意識を持っている時が危ない。そして自分の思う通りにならないと“困難事例”という扱いをしがちだ。彼、D氏も少なからずその可能性があった。けれど彼は、最期まで自分を貫いて、その人らしさを支えるとはどういうことか、私に教えてくれたように思う。

もちろん、知識を深め、制度を適切に使いこなせることも専門職として必要だ。だが、“相手の立場に立って支援する”という根本が揺らいでいたら、その支援は単なる自己満足ではないかと思っている。そして、相手の立場に立つからこそ制度の隙間を見つけて改革していく、ソーシャルワーカーとしての仕事ができるのだと思う。

私自身、このまちに暮らす住民のひとりだ。いずれ歳をとり、天に召される時が来る。その時まで、私の生き方と逝き様を支えてくれる地域を、これから全力で作っていきたいと思っている。

追記

「平成27年9月関東・東北豪雨災害」により、常総市をはじめ、茨城県内の広い範囲に甚大な被害が生じました。全国の皆様から多大なるご支援を頂いておりますこと、一県民としてこの場をお借りし、深く感謝申し上げます。瓦礫が無くなったあと、地域と生活を再建していくときにこそ、ソーシャルワーカーの力が重要です。今後ともお力添え下さいますようお願い致します。